

# ひとりひとりの子どもをみつめて ①

赤羽 美代子

六月のなかばのある朝、一日に必要な活動力を小さな身体に一杯詰めて、子どもたちは登園して来た。玄関で朝の挨拶をする教師に、元気な声が跳ね返ってくる。年長組のM夫は、同じ官舎に住む五名の友だちの後から、そっと私の目を見て朝の挨拶のかわりにする。

M夫は普段、一人で砂遊びか、ホールや園庭でぶらぶらと他の子どもの遊びを見ている。子どもたちもそんなM夫を、あまり誘おうとしない。教師の誘いや語りかけには、大変に緊張する。そんな子どもであった。

その日、M夫はふらりとホールに入ってきた。年長組の男子四名が箱積み木で作った飛行機の側に立つ。M夫の目には力が感じられない。一、二度小さな声で積み木をさして何

か言ったが、子どもたちには聞こえない。私はM夫に語りかけ、遊びを誘導したい気持ちをおさえた。今働きかけたら、M夫はたちまち自分の世界に逃げ込むに違いない。私はM夫と同じ位置に立って何かを共感し、M夫が心を開く時を共に過ごしたいと願った。

丁度ホールには「白鳥の湖」の曲が流れて、数名の女兒が踊っている。そこで私は爪先き立って、両手を白鳥の羽根のように優雅に？ 舞わせ、小走りにバレリーナよろしくM夫の前を通過した。M夫の存在には全く気づかぬ振りをして、ホールの中央に出た。その時ホールの一角から「先生、相撲をとろう」と迎えがきた。M夫は私を目で追い、身体を一回転させて私の行動を見ている。今や観察者はM夫であり、私が観察される立場となった。

M夫の視線を背中に感じながら、右手を白鳥の羽根にし、声なき手(心の手)でM夫を呼んだ。M夫は何と感じたのだろうか。ホールの床に張りついた上履きを、一足一足剝がすようにゆっくりとやってきて、マットの周囲にひっそりと立った。

相撲をとる順番は決まっているようで、子どもたちは端から一人ずつとび出してきては、私と力一杯四つに組んだ。しばらくすると、M夫の番がきた。M夫は自分の番も気づかず

にいて、後ろの子に押されてビョンとマットの上にあがる。一瞬ひるんだ様子だが、私は咄嗟にM夫の手を取って四つに組んだ。彼と力一杯に組むつもりで、M夫の身体を抱くような型で押してみたが、M夫は微力な力を送り返すだけで本気にならない。子どもたちは「Mちゃん頑張れ」と二拍子のリズムで声援を送る。M夫はいかにもその声援に応えているかの顔つきをするが、いっこうに力が私に伝わってこない。そこで釣り出しでM夫をマットの外に出した。M夫はホッとした様子と、思わぬ友だちの声援のプレゼントに心を弾ませていた様子である。

突然一人の年長児の「皆で先生に掛かれ」と言う声に、全員の子どもたちが力一杯ぶつかってきた。M夫は最後列で、

顔を赤くして前の子の背中を思いきり押している。何を考えたのか、M夫は急に前に出て、私の胸の囲りを両手でしっかりと捕えた。手、足、肩にじっくりと力を入れて「えーい、えーい」と押してくる。

M夫が自分の世界から飛び出たと思われる瞬間に、私も共にかかわってM夫の一つの成長を感じ、また見ることができて嬉しかった。

その時、突然T子が突然口を押さえて痛いと言き出した。私はT子を引き寄せて「私は歯医者さんです」と言いながら、口中を調べてみる。他の子どもたちも「私も虫歯一本も無いの」と口を開けて見せる。M夫も目を丸くし、顔半分が口になったように大きく開けて私を突つく。「あーら、M夫ちゃんは虫歯が一本も無いのね」と驚く私に、目を輝かせて「先生の歯もみせて」と生き生きと言う。

自分の世界に逃げ込み、その微温湯の中で安住していたM夫であったが、今、そのままの自分を受け入れてくれた教師の、何かを見たい、知りたいと目を輝かせているのだろうか。

この後に続いて展開されるこの日のM夫の遊びを、次号に紹介することにした。

(霊南坂幼稚園)